

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業  
(イノベーション対話促進プログラム)  
実施状況報告書

平成26年4月

国立大学法人北海道大学

## 目 次

|     |                           |    |
|-----|---------------------------|----|
| 1   | 当初計画の概要                   | 3  |
| (1) | 当初設定した事業の目的等、計画の概要        | 3  |
| (2) | 実施体制                      | 3  |
| 2   | 業務の実施状況                   | 4  |
| (1) | 事業全体の概要                   | 4  |
| ①   | イノベーション対話の実施              | 4  |
| ②   | Webを使った情報提供               | 4  |
| ③   | ファシリテーター育成                | 4  |
| ④   | 地域の「強み・幸せ」を探るための「指標」の作成   | 5  |
|     | 【ワークショップ概略】               | 5  |
|     | 【学内外への情報発信】               | 5  |
| (2) | 実施したワークショップの詳細            | 6  |
| ①   | 1回目のワークショップ（札幌ワークショップ）    | 6  |
|     | ア. ワークショップの概要             | 6  |
|     | イ. ワークショップの検証             | 7  |
|     | ウ. ワークショップのアウトプット等        | 7  |
| ②   | 2回目のワークショップ（函館ワークショップ）    | 7  |
|     | ア. ワークショップの概要             | 7  |
|     | イ. ワークショップの検証             | 8  |
|     | ウ. ワークショップのアウトプット等        | 9  |
| ③   | 3回目のワークショップ（帯広ワークショップ）    | 9  |
|     | ア. ワークショップの概要             | 9  |
|     | イ. ワークショップの検証             | 10 |
|     | ウ. ワークショップのアウトプット等        | 11 |
| 3   | 事業実施により得られた知見・課題等         | 12 |
| (1) | 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等 | 12 |
| (2) | 今後の活動への展望                 | 13 |

## 1. 当初計画の概要

### (1) 当初設定した事業の目的等、計画の概要

大学内で発明された知財（シーズ）や企業におけるニーズを元に産学連携をスタートさせても、それが社会のニーズと噛み合なければ大きな成果をあげることはできない。そこで本事業では、本学と産学連携において実績がある企業に加えて、これまでの産学連携には参加していなかった分野の企業やユーザー、地域のステークホルダーにも参加を求め、対話型ワークショップを通して、地域において人々が理想とする「少し先の社会」のニーズを知り、さらにそのニーズから、全く新しいウォンツを発明し、これを大学の研究（シーズ）と結びつける、これまでにない産学連携のプロセスを構築することを目的とした。

本事業は、米国で開発された共創を生み出すミーティング手法であるフューチャー・サーチをベースにした新しい対話手法を開発することとした。これを活用し、北海道の地域社会、さらには日本社会でより良く機能する未来思考の方法論、相互理解や信頼関係を構築する対話手法になるよう応用、新しい対話の仕組みを開発する。

人の関わり方の仕組みづくりとして、知的資本経営を元に海外から投資を呼び込むために北欧で開発され、現在ではヨーロッパ各国で、企業やパブリックセクターに広まっているフューチャーセンターの取り組みを北海道に導入する可能性について検討する。その過程で、地方自治体や地域のまちづくり会社、NPOなど連携組織を発掘し、関係性を強化し、大学は各地のフューチャーセンターのハブとしての機能を果たすようにする。

また、ファシリテーションの講習を実施し、これまで大学や関連団体で活躍してきた産学連携コーディネーターや北海道大学の大学院生に対話の場を創造できるファシリテーター技術を身につけてもらう。

これらの取り組みにより、力強く活動を維持する地域埋め込み型のフューチャーセンターが北海道に根付き、大学と地域経済、地域社会が一体となった、未来思考、デザイン思考の対話をきっかけとする産学連携へと繋がっていくことを目指す。

### (2) 実施体制

本事業は本学創成研究機構 URA ステーションが中心となり実施する。本学産学連携本部からは産学連携コーディネーター、マネージャーが運営に参画する。また本学創成研究機構研究支援室と連携をとる。

以上の運営組織から職員がファシリテーターとして参加するほか、本学高等教育推進機構科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）修了生や本学大学院生からファシリテーターを募集し講習会を受講した後、ワークショップに参加する。

さらに、外部機関としてNPO 法人 Educational Future Center、株式会社道新デジタルメディアなどと連携をとり、さらなる充実を図る。

## 2. 業務の実施状況

### (1) 事業全体の概要

#### ①. イノベーション対話の実施

フューチャーセンターの拠点となる候補地を道内地域より選定した。また、自治体やまちづくり会社、NPO と共同し、未来思考のイノベーション対話手法として、フューチャー・サーチをベースとした対話プログラムを開発し、候補地において実施した。

ア. 北海道における主要地域の中から、既にフューチャーセンターのような取り組みを実施した実績を持ち、自治体や地域社会で未来思考の取り組みを始めている地域（札幌・函館・帯広・旭川・北見）と連携を図るための調査を行った。

イ. 欧州で開発・発展してきたフューチャーセンターの取り組みがどのように地域に根付き、イノベーション創出に生かされているかについて、オランダ（The Shipyard, LEF future center, Dialogues House）、イギリス（Think Lab.）、フィンランド（ラップランド大学サービスデザインコース、OECD フィンランド統計局、トゥルク大学フューチャーリサーチセンター）、スウェーデン（ストックホルム商科大学日本文化センター、Happiness INDEX のヒアリング）にて調査を行った。

ウ. アの調査地域の中から札幌市、函館市、帯広市の3都市をイノベーション対話のワークショップ開催地として選定した。

エ. ウで選定した多様な特徴と可能性を持った地域において、フューチャー・サーチをベースとした対話手法を用いたワークショップを実施した。

#### ②. Web を使った情報提供

1の成果を定着させ、また日本全体でシェアするため、Web および動画を使った情報提供を行った。

ア. 本事業のWebサイトを構築し、欧州での調査の成果（①-イ）や、イノベーション対話の成果（①-ウ）をシーズ・ニーズ創出強化支援事業ウェブサイト「北海道大学フューチャーデザインプロジェクト」（<http://gjp.sakura.ne.jp/web/hokudai/URA/index.html>）にて公開した。

イ. 成果発表シンポジウムにおいてはU-STREAMにて中継を配信した。

#### ③. ファシリテーター育成

イノベーション対話の実施を支えるファシリテーター育成の仕組みを大学内外に構築することを目的とし、ファシリテーター講習会を開催した。また、学生ファシリテーターを活用したワークショップを実施し、ファシリテーターの育成を行った。

ア. 様々な企業や団体で人材育成やチームビルディングのための講習を行い、また地域の課題に対して対話を用いて解決することに取り組んで来たファシリテーターとして、長尾彰氏に協力を依頼し、フューチャーセンターの調査およびフューチャー・サーチをベースとしたイノベーション対話手法の開発を行なった。

イ. フューチャーセンターの取り組みを大学に閉じたものにせず、持続可能なものにしていくために、札幌市役所、函館市役所、帯広市役所等の自治体やまちづくり会社、コワーキングスペースおよびNPO法人等との連携を強化した。さらに、本事業の協力者であり、ファシリテーターの第一人者である長尾彰氏を講師に迎え、ファシリテーション

講習を実施した。

ウ. 北海道大学の大学院カリキュラムや共通科目の演習授業と本事業の連携を図った。当該科目担当教員と協力しファシリテーション講習会（③-イ）へ学生を参加させた。また、本事業のワークショップにおいては、学生をファシリテーターとして配置することにより、実践する機会を与えた。

#### ④. 地域の「強み・幸せ」を探るための「指標」の作成

ワークショップのアウトカムとして、地域の強みを反映した「しあわせ指標」を各々作成した。また、「しあわせ指標」をベースとして、アクションプランの作成を行った。

ア. OECD や各国が独自に、個人が自身や社会に対してどのような意識を持って暮らしているかを知る手がかりとして実施している「幸福度調査」を調査、分析を行なった。

イ. 地域の対話のテーマは、「地域の強みから考える～この町の課題と可能性～」とし、その地域に暮らす人々が、どのような生活を送ってきてどのような生活を望んでおり、どのような可能性を持っているのかを表出させ、地域に潜在する問題を「発明」する（解決するに値する問題そのものを創出する）手法「北大型イノベーション対話」を開発した。

ウ. 北海道外（東京）におけるワークショップの開催を当初計画していたが、成果発表シンポジウムを開催し、本事業について外部有識者から評価する機会を設け、作成した「しあわせ指標」を含めた「北大型イノベーション対話」の総合評価を行なった。

#### 【ワークショップの概略】

1. 過去を振り返る 2. 現在を探求する 3. 理想的な未来のシナリオを作成する  
4. コモン・グラウンド（共有できる未来像）を明確化する 5. アクション・プランを作成するという5つのセグメントに沿って1泊2日でタスクに取り組む。部屋の中及び各テーブルに全体システムの縮図が現れるように、テーマに関するステークホルダーのグループを形成することで、議論の中に多様な視点を取り入れることができる「ホールシステム・イン・ザ・ルーム」や、階層や組織が違う異質な人々が集まり、平等な関係で話を聞き、ストーリーを共有する「ポジティブ・アプローチ」という原理を特に重視する。ただし、本事業においては、特定の地域や組織の課題解決を目的とせず、大学等のイノベーションを創出する確率を高めることを目的とするため、フューチャー・サーチの、コモン・グラウンドの明確化までをタスクとする。

1. 大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業キックオフミーティング
2. イノベーション創発のためのワークショップ「函館を住み続けたい街No.1に！」
3. 北海道ヤングジェネレーション会議2014 in 十勝・帯広

#### 【学内外への情報発信】

本事業においては、以下のとおり情報発信を行った。シーズ・ニーズ創出強化支援事業ウェブサイトの作成（2-（1）-②）、欧州『フューチャーセンター』視察報告会（札幌・東京）、成果報告シンポジウム（東京・札幌）、URA北海道メーリングリスト、URAステーションフェイスブック、ツイッター、URAステーションWebサイト、まちづくり五稜郭フェイスブック、北海道大学C o S T E P 修了生メーリングリストによる告知。

## (2) 実施したワークショップの詳細

### ①. 1 回目のワークショップ（札幌ワークショップ）

「大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業キックオフミーティング」

#### ア. ワークショップの概要

##### 【ワークショップの目的・テーマ】

北海道大学で、イノベティブなアクションプランを創出する対話を開発し、そういった場を作ることができるファシリテーターの育成を行うという本事業を成功させるために、まずは、本事業を支える有志によるチームビルディングを行うことを目的とした。

既存の産学連携の枠を超えた社会連携を目指すためのアプローチとして、目指すべき像を共有化し、地域の強みや幸福度調査を探るための最初の一步と位置付け、タイトルを「大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業キックオフミーティング」とした。

札幌市が独自に作っている「スマイル指標」を参考に、幸福の範囲は広く漠然としているため、北海道大学で新たに作られる国際研究拠点のテーマである「食と健康」をテーマに、札幌市の食と健康についての幸せ指標の作成を目指した。

##### 【使用した対話の手法】

1泊2日で寝食を共にする、北大型イノベーション対話（宿泊は、クマの出没により急きょ会場を変更したため、共にできなかった）を使用した。

##### 【参加者の状況】

大学理系研究者をはじめ、行政、フード特区などの第3セクターなどから合計28名の参加者が集まった。

##### 【ワークショップの会場】

- 札幌芸術の森（北海道札幌市南区芸術の森2-75）
- ファカルティハウスエンレイソウ（札幌市北区北11条西8丁目北海道大学構内）
- 遠友学舎（札幌市北区北18条西7丁目北海道大学構内）

##### 【スケジュール】

|             |       |   |       |          |
|-------------|-------|---|-------|----------|
| 平成25年10月19日 | 12:25 | ～ | 17:00 | （札幌芸術の森） |
| 平成25年10月19日 | 18:20 | ～ | 20:00 | （エンレイソウ） |
| 平成25年10月20日 | 09:10 | ～ | 12:45 | （遠友学舎）   |

## イ. ワークショップの検証

### 【設計にあたっての仮設、狙いと実際に行ったワークショップとの比較検討】

欧州フューチャーセンター調査で得た、場が参加者の対話に影響を及ぼすという結果を検証するべく、非日常的環境を演出するため会場の設定を行ったが、実際に場所の議論にもたらす効果は絶大で、議論の内容や、タスクの実施時間等に顕著な差が見られた。

また食事の効果も非常に高く、リラックスして個人的なことに話題を及ぼすのに食事には大きな力がある。特に、さらに、通常2泊3日で行われるフューチャー・サーチの手法を日本の生活環境に適合した1泊2日のプログラムと設計した。上記効果を検証し、札幌市独自の幸福度指標の作成から潜在的ニーズを拾い上げ、次世代の研究ニーズを探ることを狙いとした。

## ウ. ワークショップのアウトプット等

### 【産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか】

食については、空腹を満たすことや、栄養を摂取するものである以上に、コミュニケーションの一つのツールという意識が高いことが各グループのディスカッションに共通して出ていた。

### 【発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか】

北大 COI-T のプロジェクト実施者に札幌市民のニーズとして「食と健康の幸せ指標を伝えた。

### 【上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか】

ファシリテーションの手法に特に興味を持つ人ではなく、ファシリテーションの経験がほとんどなくても、キックオフミーティングで議論の活発化に貢献した人を次回からのワークショップにファシリテーターとして招聘した。

## ②. 2回目のワークショップ（函館ワークショップ）

「地域の強みから考える～この町の課題と可能性～」：函館が“子育て教育したい街”で全国1位になるには」

## ア. ワークショップの概要

### 【ワークショップの目的・テーマ】

対話手法の社会実装を目的として、まちづくりに絡めてどのように北大型対話手法が

適用されていくべきか、またどのような効果があるかを図るため、函館市が最もフォーカスしたい問題、「人口減少」を改善するために、地域で活動が続いているまちづくり会社と連携し、仮課題「子育てと教育」にフォーカスした。

前回のキックオフミーティングで得たフィードバックから改訂した北大型対話手法を用い、様々な観点で函館市の10年を振り返り、現状への理解を深め、どんな街にしたいのかを話し合い、さらに幸せ指標の作成およびストーリーの共有から一歩踏み込み、今後の活動につなげていくためのアクションプランの作成および共有化を図った。

#### 【使用した対話の手法】

北大型イノベーション対話

#### 【参加者の状況】

第3セクター及び市役所、教育委員会をはじめとして、函館での事業者及び事業従事者など20代から60代まで幅広い年齢層の参加者が集まった。(合計34名)

#### 【ワークショップの会場】

大沼国際セミナーハウス（北海道亀田郡七飯町字大沼町127番地1）

クロフォード・イン大沼（北海道亀田郡七飯町字大沼85-9）

#### 【スケジュール】

平成25年12月7日 13:00 ～ 17:40 （大沼国際セミナーハウス）

平成25年12月7日 18:30 ～ 20:50 （クロフォード・イン大沼）

平成25年12月8日 09:00 ～ 12:30 （大沼国際セミナーハウス）

### イ. ワークショップの検証

#### 【設計にあたっての仮設、狙いと実際に行ったワークショップとの比較検討】

ステークホルダーを決定するにあたり、函館を住み続けたい街にするためには、仮課題を教育と子育てを課題とし、その問題に関わりが深い人たちを20代から50代まで幅広い年齢層でほぼ同数ずつ集めた。同じ世代で集まって話をしたり、多様な世代が集まったり、関心事に集まったりなど、グループメンバーの入れ替えを行ったが、年表作りや思いでの場所発表で、20代は、記憶を喚起することが難しく、同年代のグループでは対話の効果が低い。

#### 【参加者からの意見の集約】

「幅広い年代及び職種の間が一堂に会すること気づきを得られた」「事前にそれぞれの

ワークの位置づけやゴールイメージを明確にしてほしい、もうすこしガイドしてほしい」「コントロールされすぎると、意見が出にくい」「事前にグループ内で立場を越えてフラットな関係を持つこと、能力や知識等ばらつきのある多様性が大切だという対話を行うためのベースラインが明確化されていると良い」「各チームによって能力にばらつきがあり、リーダーになれる司会を運営が決めるべきだ」「新しいことや物を作ろうとし過ぎていて既存のことや物を利用しようという意識が薄い」などの意見が得られた。

#### ウ. ワークショップのアウトプット等

##### 【産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか】

新しく何かを作り出すのではなく、既存のリソースを利用し身近なところから事業を起こしたい（例：フットサルクラブの試合に合わせて市民のフリーマーケットを開催するなど）。

都市の規模が小さく閉鎖的な社会では、自分の欲求を外に出しにくいので、それを出しやすくし、出せる場所を設けていくことが消費活動にも重要、函館という都市に固有の問題、例えば外国人とどう日常生活で距離を縮めるか等、具体的なアイデアが出た。書店、コーヒーショップ等、民間施設の活用がアイデアとして出てきた。

##### 【発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか】

参加者達が自主的にフェイスブックのグループページを立ち上げ、ワークショップのアクションプランから派生して実施されている事業が記録されている。その後、参加メンバーを中心に、フューチャーセッションを継続している。

##### 【上記の結果を次のワークショップにどのようにフィードバックしたか】

年齢の多様性が議論に効果を生むことを次回のワークショップを実施する上での中心テーマに設定した。

### ③. 3回目のワークショップ（帯広ワークショップ）

「北海道ヤングジェネレーション会議 2014 in 十勝・帯広」

#### ア. ワークショップの概要

##### 【ワークショップの目的・テーマ】

本ワークショップは中学生、高校生、大学生という年齢の違う若者により「十勝帯広地域の少し先の未来について」をテーマに議論し、若年層の彼らの価値観に表出させることを目的とした「過去を知り、今を知り、自分たちの未来を作る ヤングジェネレーション会議」

を開催した。

#### 【ワークショップの設計にあたっての仮説・狙い】

中学生、高校生、大学生という年齢の違う若者を集めることにより議論に多様性が生まれる。フューチャー・サーチには教育的な効果がある。場において自分の果たすべき役割をよく理解する人がよいファシリテーションを行う。という3つの仮説に基づき、ワークショップを設計した。

参加者が未成年も含まれることから、宿泊を伴わないフューチャー・サーチではあったが、弁当の支給により1日あたりのワークショップの時間を長くし、コモンセンスまではたどり着けるように設定した。

#### 【使用した対話の手法】

北大型イノベーション対話

#### 【参加者の状況】

今回のワークショップは若年層を対象にしているため、中学生、高校生、及び大学生（留学生2名含む）が主な参加者であった。その他、大学生テーブルファシリテーターの補助として第3セクター及び企業、また、帯広の行政関係者など合計48名が参加した。

#### 【ワークショップの会場】

- 帯広畜産大学かしわプラザコンベンションルーム（北海道帯広市稲田町西2線11 帯広畜産大学構内）

#### 【スケジュール】

3月1日（土） 15:00 ～ 19:30

3月2日（日） 09:00 ～ 15:05

### イ. ワークショップの検証

#### 【設計にあたっての仮説、狙いと実際に行ったワークショップとの比較検討】

参加者が学生で年齢の開きがあるということもあり、情報提供をしっかりと行った。各テーブルファシリテーターは大学生、大学院生に務めてもらったので、事前、途中、事後に全員を集めて、心構え等の講習を行ったり振り返りを行った。大人はなるべく後ろに引いて、介入しないように務めた。

情報提供は、分量の如何に寄らず、あまり実際の対話に反映されない。大学生、大学院生は思いのほか辛抱強く、中学生・高校生を引き立て、難しいファシリテーションを乗り切っ

たばかりでなく、役割を楽しみ、充足感を表明していた。2日間を通じて、参加者の間に、共感に基づいた親密さが醸成された。

#### 【参加者からの意見の集約】

「楽しかった」、「年齢の違う人と様々な意見を共有することで視野が広がった」、「またワークショップに参加したい」という意見が半数以上を占めた。そのほか「幸せという価値を測れないものを指標化して数値ではかることに疑問を感じる」、「過去と未来と幸せ指標のつながりを見つけられず悔しかった」、「普段の思考と違うことを考えるには慣れが必要なので、考える事に慣れる仕掛けもほしい」という意見や、留学生から「母国ミャンマーでも対話型ワークショップを導入したい」という感想があった。ファシリテーターからは「若いと打ち解けて対話が活性化するまで時間がかかる」、「正解がない中で答えを作っていくのが難しくもあり、やりがいがある」というフィードバックが得られた。

#### ウ. ワークショップのアウトプット等

##### 【産学官連携活動につながるどのようなアイデア・コンセプト等が発掘されたか】

若年層は個人的な事柄についての意識は高いが、地域の経済等、社会について考えるのが難しく、考える時も自分との繋がりで考えている。

##### 【発掘されたアイデア・コンセプト等についてどのような活動を行ったか（プロトタイプング、調査研究等の実施状況について）】

ワークショップ終了後大学生、大学院生に対して振り返りの時間を設け、内容を確認し合った。情報提供者に対してフィードバックを行った。全ての幸せ指標を web サイトで公開している。

### 3. 本事業実施により得られた知見・課題等

#### (1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等

##### 【成果・効果】

本事業で開発した対話手法である「北大型イノベーション対話」は、各地域の強みを「しあわせ」指標として明示することにより、参加者（ステークホルダー）が未来へのアクションプランを「発明」し、自然にアクションへと繋げるものとなった。その典型例が函館である（(2) -②）。函館においては本事業のワークショップがきっかけとなり、フェイスブックにグループが立ち上がり、現在も自発的にイベントを行っている。産学官連携活動において、地域協働は必須である。地域が自発的に課題解決に向けて活動を行うような効果が見込めたことは、「北大型イノベーション対話」が産学官連携活動に有用であることを示している。

本事業を通じて札幌・函館・帯広の3地域でワークショップを開催したが、函館がほか2地域のワークショップと異なる最大の点は、1泊2日で「寝食を共にする」唯一のワークショップであったことである。全てのワークショップにおいて、食事を共にする回数が増えれば会話の内容も変化することが顕著に見て取れたが、特に函館のワークショップにおいては、1泊2日という時間の中でワークショップ外の時間の重要性を再認識させられた。初めて会った参加者同士が自らの意見を自由に述べることは容易ではないが、食事や睡眠など生活の全てを共有することにより、自由に意見できる環境を作ることができるということが「北大型イノベーション対話」の最大の特徴となった。

また、本事業を通じて担当者はイノベーション対話手法のノウハウを蓄積し、産学官連携活動に活かすための学内外の協力体制も確立した。特に、市役所等の自治体、NPO 法人との連携により、本事業における成果を還元できる環境を整えることができた。詳細は(2) 今後の活動への展望に記載する。

##### 【問題点・課題】

現代社会において、社会人を2日間（1泊2日）拘束することは容易ではない。特に拘束する場合には、土日を使うことになり意欲を持った参加者を集めることはさらに困難を伴う。本事業においては、札幌・函館・帯広の各地域においてコアとなる機関および人物にご協力いただき、ステークホルダーを集めることができたが、対話型ワークショップの実施に当たっての課題となる点である。また、参加者の議論を活発化させるための工夫や誘導等、ファシリテーターの力量に頼る部分も大きい。本事業において完成させた「北大型イノベーション対話」は、産学官連携活動に有用であることは上に示したとおりであるが、ファシリテーターがセットであり、ファシリテーターがその意味を理解した上で利用することが不可欠である。現在、このようなファシリテーターを育成するシステムは確立

されていない。本事業で行ったファシリテーション講習会のような講義を大学等教育機関のプログラムに組み込むなどすることが必要である。

## (2) 今後の活動への展望

本事業実施期間中において、産学官連携活動に活かすための学内外の協力体制も同時に構築した。このネットワークから成果を評価され、「北大型イノベーション対話」を用いたワークショップの開催依頼が既に数件ある。また、本学 COI-T で計画されているコホート研究を行うための住民との対話に本事業成果の応用する等多種多様なニーズがあがっており、汎用性の高い対話ツールとして認知されていることがわかる。

フューチャーセンター調査での知見は、本学に新たに建設されるフード&メディカルイノベーション国際拠点へ還元され、フューチャーセンターとしての機能を備える建物として計画中である。建物内で研究を行う大学研究者や企業研究者だけでなく、外部機関の利用者、一般市民までが対話の場として利用することが可能となる。

札幌市や NPO 法人と協力し、札幌にフューチャーセンターを作り対話の街にするといったプランも検討されている。「北大型イノベーション対話」と札幌のフューチャーセンター構想を組み合わせることにより、グローバルレベルの MICE 都市としての札幌を実現可能なものとする。

さらに、本事業成果はイノベーション人材育成に活用することが可能である。本事業のノウハウを十分に活かした教育プログラムを設計し、今後の大学院教育に組み込むことで、イノベーション人材育成に貢献することが期待できる。